
勇者のまなびやっ！

紅月 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者のまなびやつ！

【Nコード】

N8275W

【作者名】

紅月 空

【あらすじ】

世界に“魔物”があらわれ、約100年後。人は、魔物に対抗できる魔法をみにつけ、勇者を量産することをきめた。

その学校こそ、勇者育成学園。

低レベルクラスの俺は、日々魔物駆除をしながら、親友ヤシロ達と学園生活を送っていた。

成績なんてどうでもいい。俺はゆっくり毎日を過ごすのさ。

バトル、学園、恋愛、コメディ、いろいろあります！

プロローグ

「これで任務完了、か」

後ろで魔法撃ってただけの俺や他の同級生二人はほとんど無傷で済んだが、前線で刀を振り回していた同級生（ソラくんだっけ）は、返り血を浴び、足から出血をしていた。俺が治癒呪文をかけると、すぐに傷は癒えた。

「何回やつても気持ちのいいもんじゃねえな」と、同級生の一人がいう。同感だ。

いくら魔王とはいえ、イキモノをこらすのは気持ちのいい気がしない。特に、弱い奴に複数で挑むのも、だ。

「そーいやユウ君はこれで何体目？」何体、というのは、魔王のことでだろう。

同級生の女子の聞き飽きた質問に、素直に答える。「4体目だな」「えっ？嘘っ！」嘘じゃないって。

はあ、やっぱこんなんだから、いつまでたってもDランクなんだろうか……。



魔王一体につき、何人の勇者が必要なのか。それは、勇者自信の能力で変わってくる。

すぐ強い勇者なら、一人でも魔王を倒せるだろうし、逆に仲間の力を借りないと倒せない勇者もいるだろう。

逆にいうと、強い勇者が4，5人いれば魔王なんてあっさり倒せるのだ。

それを実現するためにできたのが、〔勇者育成学園〕という国立

の学校である。国が作ったと俺でもわかる、何のかつこよさもないネーミングだ。人々の間では“勇学”と略されることが多い。

簡単に説明すれば、生まれて12年一（つまり12才）で入学でき、20才までそこで勇者としての知識・実力を養い、一般的教養も学ぶ学園である。まあ、魔物退治も請け負う機関だが。

しかし、勇者の素質を持つ人間は数少なく、ほとんどが国のデーターで選ばれ入学させられる。つまり、勇者になりたくてはいるのは難しく、なりたくもないのに入学権利を得られてしまう奴のほうが多いのが現状だ。

そしてこの俺、“不知火優”^{しらぬい、ゆう}は、後者でありながら入学した生徒の一人である。学費が安く、国の支援もあるから、と母が入学手続きをしたらしいが、とんだおせっかいである。戦いは嫌いだから。

だがいまさらやめる訳にもいかず、むりにでもこの学園生活を楽しもうとしているのだが……。

プロローグ（後書き）

初投稿ならびに、初めてしっかり書いた小説です。読みにくいかもしれませんが、暖かいアドバイスがいただけたら幸いです。

さて次回、魔王の数とは、学園の意味とは。そこらへんをかいていきたいとおもっています。どうぞ期待！

寮にて

“勇者育成学園”の開校。それは、およそ200年前にさかのぼるらしい。

地球に突如現れた、魔物といわれる怪物たち。そして、それを操る魔王の出現。

世界政府は、全軍事力をあげて立ち向かい、人類と魔王軍のにらみ合いが続いた。

そんな中、世界に「魔法」を使えるものが出現しはじめる。

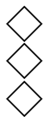
その魔法使いたちは、圧倒的な力で魔王軍を消滅させた。人々のあいだで語り継がれる〈勇誕の日〉だ。

それから、政府は次々とあらわれる魔物と魔王に対抗すべくある学園を作った。それが「勇者育成学園」である。

「勇学」と略されるこの学園では、魔王があらわれたとき、任務として学園から4人1組の“パーティー”が派遣される。

そして、魔王にもランクがあり、弱い魔王はDランク、そこから強くなるにつれC、B、A、A A Aとランクが上がっていく。勇者候補生も同様にだ。

そして俺は、Dランクのため、Dランク魔王の任務に派遣され、寮にもどってきたんだが……。



「あゝ、だりいだりい。疲れたー。明日授業休もつかなー」魔王退治の次の日が授業など、ふざけてると思う。

「そんなんだから、単位おとしてDクラスなんだよ。もっと努力し

て、Bくらいは目指さないと駄目だよ？」

こいつは同じ寮の御船社^{みふねやしろ}。Aクラスだ。2人で1部屋なのだが、ランクは関係なく入学順で割り振られる。社^{やしろ}も俺と同じ16才だ。「と、いわれてもだな。俺は勇者を希望してる訳じゃないし、第一戦いは嫌いなんだ」

「実力は、Aクラス並なのにどうしてこうなるのかな……」へっ、お世辞は聞き飽きたぜ。

だいたい、魔王がこんなにいるのがおかしいんだ。昔のあーるぴーじーとかいうゲームでは、魔王一体が常識だったらしいぜ。今は、いろんな規制で魔王がでるゲームなんて売られてないが。

「そうはいつでも、これは遊びじゃないんだよ？真剣にしないと、命も危険だし」

「あーもう、うっせえ、俺もう寝る！おやすみ！」

俺はそういうと、布団に潜り込んだ。説教なんて聞いてられっか。ましてや同級生の説教なんか。

そして俺は眠りについた。

「優、勉強机整理しとくよ？……あれもう寝た？」

寮にて（後書き）

短くてすいません。次は長く書きたいと思います。
感想どんどんください。では。

鬼の授業と女子生徒!?(前書き)

11／6日に改稿しました。

鬼の授業と女子生徒!?

〈時間割 6月x日〉

1, 接近戦実習

2, 勇者学

3, 魔法学

4, 薬物学

昼食 (10分)

5, 剣術指導

6, 魔物学

7, 補習

8, 補習

9, 補習

10, 補習 (7, 8, 9, 10は5時から9時まで。他の補習者はいないから、そのつもりで)

「……なんだよ、コレ。俺の好きな遠距離授業ないし、第一補習俺だけじゃん!」

「……さぼってるからだと思うよ?」 いいんだ、社やしろつつこまないでくれ。

社やしろが持ってきた時間割、それは地獄への案内図のようだった。(優にとって、だが)

そして、なにより補習がおおい。逆に、優が目指している魔法使いになるための、授業が少ない。

……しかも補習は、俺だけ、という話である。おい。

「これじゃ、最低でも10時に寮にもどってくることになるな」
そもそも、俺だけってのは、やっぱおかしい……。みんなさぼってないのか? そんな青春でいいのか?

「優、それは駄目人間のいうことだよ…」

「うるさい、うるさい！補習なんてやってられっか！やすんでやるー！」

「だめだよ。今日くらいはいかないと、単位おとして留年だよ？」

正論である。実際問題15才からは、留年制度があるのだ。

おい、なんで社^{やしろ}がそこまで気いつかうんだよ。

「なんでって…、そりゃ来年も優と一緒に学園生活送りたいもんくつ、そんな言い方されるといかなるをえないじゃないかっ。」

社は男なのに、妙に接し方や動作が心をくすぐる。顔も中性的だし、初対面だと、性別がわかりづらいんじゃないだろうか。いやいや、待て。今はそんなこと考えてる場合じゃない。今すべきなのは…

「仕方ないな。今日はいくよ、授業」あんなこといわれて断るのは人間じゃない。

「ホント？ よかったあゝ」

「そこまで安心しなくても…。まるで俺駄目息子じゃないか…」

「さぼりは駄目人間だと思うんだけど、ってかさっきいったね、これ」

それより、授業の準備準備。

「あ、そうだね。ごめんごめん」

久しぶりってほどでもないが、接近戦実習は、ほとんど休んでいる。嫌いなものもあるが、担当の九護教諭^くが（教諭より鬼先生のほうが、適切だろう）苦手なのだ。怖いのだ。

九護教諭、いや鬼は、問題をおこした生徒を生徒指導室で一日指導というのは序の口で、体罰はもちろん、あげく魔物討伐に一人でいかされたりするのだ。（先生もついてきてはくれるが）

まさに、先生の鏡ともいえる先生である。

「優？ 普通そんな先生はいないし鏡っていいないんだけど…」

「え…、まじ？」

まあ、物心ついたときからこの学園なんだし、世間一般の先生像なんてしらなくて当然か…。社は物知りだからしってるのだろう。

まあ、とにかく恐ろしい教諭なのだ。

でも、社の頼みと九護の鬼指導から逃げることを天秤にかけた場合、社の頼みの方が格段に重い。うむ、頼みを断るのは駄目だ。

「ふっ、鬼指導なんか楽に乗り切ってみせるぜ!」「おお、かつこいいよ!優!」

1時間目の授業、簡単にのりきってやる!



1時間目

前言撤回。無理、もう死ぬ。

意気揚々と1時間目の接近戦実習の授業場所、すなわち戦闘ドーム(昔あった東京ドームとかいうドーム一個分らしい)にいった優と社だったが、九護は優に目をつけるなり、

「久しぶりだなあ、優。やっと出席するようになったか。久しぶりで体もなまっとるだろう。特別メニューを考えてあるからじっくり体動かしていけよ」

と、いやな笑みをうかべながら言い放つと一枚のプリントを渡してきた。そのプリントの内容は何かというのと、

腕立て伏せ300回、腹筋300回、ランニング、ドーム10周、竹刀素振り500回、などハードメニューの盛りだくさんであった。

いやしかし、コレどう見ても無理だろこの1時間で全部は無理だつまり補習か?補習なのか?などと考えている優にむかって、

「ふふっ、頑張りなよ？」と社の哀れみのこもった励まし。あげく、九護は、俺につきっきりで、休む暇もない。

他の生徒はどうすんだよ！

「心配するな。おまえみたいにさぼる奴らじゃない」皮肉たっぷりである。

30分後……

「ほら！あと、腕立て100回！」「無理っ、だって、絶対っ、不可能っ」

ゼエ、ゼエ、と息が荒くなるが、鬼のメニューは終わらない。

「次はランニングだ」「無理だー！ー！」

「南無三」ドームの端で、十字をきる社であつた。

「……もうあんな教科うけない」

「あはは……。まあ休んでたのが悪いんだし、今度からは通常授業だつて」

「その通常授業だって、やることほとんど変わらないだろ」

通常授業は、筋トレや体術などばかりで、接近戦をしないならうけなくてもいい授業である。しかし遠距離戦志望の生徒も、1年に何回かは出席しないといけない、という最低ラインがあり、俺はあと6回ほどである。

「6回だよ？ 6回。楽なもんじゃない」そうはいうがな。俺は目につけられてんだよ。厳しいんだよ。

「つまり、さぼってもいいこと無いってことだよ」

「もういい、聞き飽きた。次は勇者学だっけか。まあ、寝ておけばおわるな」

「聞き飽きたって口癖？っていうか、寝ちゃ駄目だよ！」

「おもしろくないんだから、寝ちまうんだよ。暇なんだよ」

「もう……。ノートとるくらいならできるでしょ？」

「あっ！ノート忘れた！ちよいとりに戻る！」「えっ？　ちよ、もうチャイムなるよ？」「間に合わせる！」タッ！　「……いっちゃった」

寮まで走って30秒、授業まではあと2分か……。ギリギリ間に合う！

寮から勇者学の教室は、幸いなことに近い。このままいけば間に合う：はずだったのだが。

「おううわ！？」「へっ？」ドンッ！と曲がり角で、一人の女子生徒にぶつかった。

女子生徒は、勇学の制服（カッターシャツと膝丈より少し短いスカート）をきており、ショートカットですこし茶髪で……

「ってそんな場合じゃない！早くいかないと！」と、寮にいそごうとした優^{ゆう}だったが、女子生徒の教科書類が散らばっていることに気がついた。

「すまん！」優はすぐに教科書類を拾い、積み重ねた。

「急いでんだ。じゃあな！」

あと1分、というところで寮につきノートをつかんで教室までダッシュする。勉強道具整理しといてよかったっ！

あとは教室まで走るだけ！

勢いよくドアをあけ教室に入り、一番後ろの端っこにすわったと同時にチャイムがなった。ギ、ギリギリ……。

「あつ、間に合ったんだ。よかった」と、斜め前に座っていた社
がこちらを見て囁く。やしろ

だが、社の言葉に返事はしなかった。いや、する余裕が無かった。

なぜなら、さきほどぶつかった女子生徒が、隣の席に座っている
からである。

「「お前つ（あんたっ）さっきの！」」

なんだコレは一体なんなんだ。どこかの漫画のワンシーンじゃね
えかつ！いや、あれは転校生だったか……、いや、そうじゃなくて！
「さっきはすまんっ！」とりあえず謝る。なぜとなりの席かが予想
できたから。つまり、俺のせいでギリギリになったのだろう。

「あのねえ、あんたのせいで遅れるとこだったのよ！？ホント、曲
がり角では注意してよね！」

「仕方ねえだろ！あれは急いでたから！」

「どうせ、忘れ物でしょ？ あんたが悪いんじゃない！」

「2人とも、そこまで。授業中だよ？」

社のいうとおり、授業は始まっている。そして、クラス中がこち
らを見ていた。

結局遅刻と変わんねえじゃねえか……。



2時間目、これほど気まずい授業は初めてだ。なにせ、殺意の視
線が隣から飛んでくるのだ。目をむけたら、殺られる。

一応ノートはとったが、授業の内容はまったく頭にはいらなかつ

た。

3 時間目 魔法学

「やっと得意授業だ」とうかうかもしていられない。さきほどの女子生徒がみているのである。

「ねえ、優。あの人となにがあったの？」
社に一部始終を話した。

「へえー、それで…」

「なあ、あいつなんて名前なんだ？」

「ん、あの人？ あの人とはたしか…」五月雨 魅琴^{さみだれ みこと}「だったと思うよ」さすが物知り。

「しかし。どうしようか。ものすごく怒ってるっぽいなあ。ここは無視しとくか。そんなことを思っていたら…」

「今日の授業は2人1組で、魔法の実習、つまり魔物退治をしてもらいます。実習ドームに移動してください。そこに魔物をだすのでふむ、実習か。となると、下級ゴブリンとかを倒すんだろうな。というか、またドームか…。2人1組は、社とでいいか。など、考えていたら、ドームについた。

「なあ、社、一緒に」といいかけたところで、

「ペアは同じランクの人と組むように」と先生。

困ったな、Dランクで仲のいいやつはいないし。まあ、ペアがない奴探して組むか。

ということ、ペアあまりがでるまでまってたんだが……

「「まさか、お前^{あんた}になるとは……」」

そう、話題の五月雨^{さみだれ}である。今日はつくづくついてないな。

「五月雨だっけ。お前Dクラスだったのか」
さみだれ

「文句ある？ていうか、なんで名前しってんのよ！」

名札見ればわかるだろ、という返事をしたとたん俺の名札をジロジロみてきた。

「ふ、ふちび、すぐる？」

「とことんまちがってるな。まあ、優をすぐる、とか読まれることは多い。ふちび、はさすがになかったが。」

「なんて読むのよ…」

そこまでして聞きたいか。

「聞かないと、なんかあったときに被害届だせないでしょ！」
俺をなんだとおもってんだよっ！

「しらぬい ゆう、だよ。覚えとけ」

「変な名前ね」ぶっ飛ばすぞ……。

「五月雨、も珍しいと思うが？」

「一緒にしないで。どうせ、魅琴って名前も変だとおもってんでしょ…っ」

「いや、普通にかわいいと思うが。ぴったりの名前だろ」「っ！」

いや、こんな茶番やってる場合じゃねえ。案の定下級ゴブリンも放たれてる。

倒しにくぞ。

「い、いわれなくてもわかってるわよ！」

10分後……

「あんた…、何なの？」驚くのもむりはない。なにせ、俺がつかう魔法はAランクでも使えない奴は多い。（社は剣術をつかうから別として）

この世界の魔法、というのは錬金術に依っていて、氷の刃を撃つみたいな、氷呪文は氷を使用して使う。

やり方は、手のひらサイズの氷をもち、呪文を唱えて発動させる。火や電気も同様だ。

ただ、俺がつかう上級呪文は、敵をおしつぶすほどの氷をおとしたり、半径2メートルはあろうか、という火球をだしたり、雷おとしたり。こういうのは、修行をしてコツをつかまないと操れない。昔から、エアガンとか好きだった。つまり、遠距離攻撃がすきだった。

この学園に入学して、魔法の存在をしったときから、もう修行修行の毎日で、そのせいで授業にでない気もする。

今おれのまわりには、氷づけのゴブリン、ゴブリンの丸焼き、黒こげのゴブリンなど変死のオンパレードだった。まあ、こいつらは弱いし下級呪文うってただけど、下級も究め^{きわ}ているから結構高威力だ。

「なんでそんな強いのかよ……」まだ呆然としている五月雨。社も最初は驚いてたなあ。

「もしかしてあんた、フリーダム マジシャン「自由の魔術師」持ち？」

「うん。そうだよ」ワクワ〇さんみたいな言い方だぜ。

フリーダム マジシャン「自由の魔術師」、それは何千万に一人の確率で体に宿る能力である。

このラノベみたいな能力の効果は、だいたいの物質を魔法に使用できたり、魔法上達かはやかたり、いろいろな研究で発表されてるが俺自身あまり知らない。知りたい奴は、社にきいとけ。

「それより五月雨、」「魅琴でいいわ」……ん？

「名前ですんでいいっていつての！一回で聞き取りなさいよ！」

「そうか、じゃあ俺のことはユウでいいぞ」

「は？当たり前じゃない。どうして私が名前でよばせてあげるのに、こっちは名字でよぶのよ。わかるでしょ？」

なんで怒ってんだ？

「とにかく、ぶつかったことは許してあげる。だからもう気つかうのはナシ。わかった？」分かった。

「じゃ、今日の昼屋上でね。」「なんでだよ」「昼食でしょ。わか
んないの？」

いや、わかるがいきなり一緒に飯くおうってのはどういう風の吹
き回しだ？

「意味わからん、って顔ね。いい？もうあたしたちは友達なの。ご
飯くらい一緒に食べるのが普通でしょ？」へー、もう友達なのか。
怒ったり、友達宣言したり、忙しい奴だ。

「それはいいが、お前、女子の友達と飯くわないのか？」

「気があうやついないのよ。それに、あんたといたらおもしろそう
だし、同じDクラスでしょ？」

「そんなもんなのかねえ……。じゃあ、友達も一人連れて行くぞ？」

「えっ？ まあ、いいわよ……。好きにして」

おい、なんで残念がるんだ。

こうして、新しい友達？ができた。また口うるさいのが増えたっ
て感じだがな。ま、美人だしいいか。

「あんた、今私についてなんか思ったでしょ」「なんでもねえよ」

「ふふっ、仲直りできたんだ。一件落着だね」遠くから眺める社で
あった。

鬼の授業と女子生徒!?(後書き)

次回は、四時間目からはじまります。

五月雨の紹介と社との出会いの回想、そんなところでしょうか。

次回「あの日の誓い」、お楽しみに!

あの日の誓い 前編

4時間目は何事もなくおわり、約束の昼食である。社も快く返事をしてくれたので一緒に屋上に向かう。

「屋上で待ち合わせだっけか」

屋上は俺たちの寮の階段をあがって5階にある。国の設備ともあって、5階建ての寮はとても大きくきれいだ。屋上からの眺めは、勇学があるナガノの街を一望できる。

このナガノのいう街は、ニッポン列島の中心近くに位置しており、東西南北どこに魔物の群れが出現しても対応できるようになっている。

「それにしても、めんどくさがりの優が、友達つくるなんて珍しいね」

「押し切られたんだよ。友達になりたいっていわれて断れないだろ」「ボクは友達に入ってる？ 優」

当たり前だろ。友達っていうより、親友の方が正しいくらいさ。

「ふふっ、よかった」

社は嬉しそうに笑う。そんなやりとりをしているうちに屋上についた。

「遅かったじゃない」もうきてたのか。せっかちなやつだ。

ミコトはもうきていて、至って普通のビニールのマットを広げていた。

「飯くうのにおおげさだな。そんなでかいの広げなくてもいいだろ」「うるさい。地面にそのまますわったら汚いでしょ」

む、性格に似合わず清潔だ。「なにかいった…」「いつてないいつてない」

なんか心読まれてるな。いやいや、そんなことよりやるべきことがあった。

「紹介する。俺の同居人にして友達の御船 社だ」「よろしくね、ミコトさん」

「よ、よろしく……」

なぜか、緊張しているミコト。そうか、社が美青年だからか。見惚れるのも無理ないな、うん。

「挨拶はこれくらいにして、食べようか。昼食の時間は短いし」社は腕時計を見て言った。

「そうだな、あと7分だし食い始めるか」「う、うん」

緊張してるな。もしかして、男2人だから居づらいのかな。うん、そうだな。

「おい、ミコト。もっとリラックスしろよ。飯が不味くなるぞ」「あ、ああ」

一言ずつしかしゃべってないな。どうしたもんか。

と、おもっていると、

「あ、ボク飲み物買ってくるね」と、社が気をつかって屋上からでていった。そんなことしなくてもいいんだが。

「なあ、ミコト。社が苦手なのか？」

「いや、そんなんじゃないけど……」

「男2人で遠慮してるのか？」

「へっ？ 男？」

まさか、女だとおもっていたのか。そんな、どこかのラノベじゃあるまいし。

「ああ、社は男だぞ？ 正真正銘」

「い、いつから友達だったの？」

「いつだったかな。たしか――――」

あの日の誓い 前編（後書き）

次回もお楽しみに。

11／6日に改稿しました。

あの日の誓い 後編(前書き)

あの日の誓い 後編

……あれはたしか13才のころだったか。13才から寮生活が始まるのは分かるだろ？寮に行く奴はすくないけど。

で、俺は寮にはいる少ない生徒の一人だった。そこで、社と同じ部屋割りになったんだ。

7才から12才まで、友達なんかつくらないで、魔法の勉強ばっかしてたおれだから、どう話しかければいいか分からず1, 2週間がすぎた。その間は男か女かわからなかったな。

そして、ある日の課外授業。第7学年（13才）がいく魔物退治の授業だ。

俺は、同じ部屋の社とペアにされてナガノの端の森に遠征、ゴブリン10体の討伐という形で授業がおこなわれた。後で聞くと、先生が裏からこっそりついてきていたから危険は少ないらしいけど、そのとき先生はそこらには生息していないはずの上級魔物をみつけて、相手してたらしい。

先生が、もし上級魔物と戦っていなかったらこの右肩の傷もつかなかっただろうし、社とも、友達じゃなかったかもしれない——



——無言だなあ、とつくづく思う。うらからついてくる杜くん（たぶん男）はあまり話しかけてこないし、自分も話しかけるのは苦手だ。そのせいで余計に静かな森のなかをあるくのはこわかった。ちよつと話しかけてみようかな……。

「なあ…」 「何…？」 「君って、剣術使うの？」 「うん、そうだよ…」 「……」 「……」

会話が弾まない……。言葉のキャッチボール拒否である。

そしてしばらく進むと、

ガサッ、

「なんだっ？」 「ゴブリンかも…」

くっそ、ここででてきたら確実に厳しい。今使える魔法は、氷と火だが、森で火をつかうのは危険だ。

もつと開けた場所にでなければ氷しかつかえない。

「氷が5個か…」

5個では、上手くいってもゴブリン5体だ。残りの5体を社くんにまかせるのは危険だろう。

そんな計算をしているあいだに、

「ギシュアーッ！」 「ビャギューッ！」

3体のゴブリンが茂みから出てきた。

「っ！ アイスピアッ！」

優の前に氷の槍が生成され、ゴブリンへと飛んでいく。

「グフヤッ！」と、2体の体を貫いたが、1体は残ってしまった。

残りの1体が優に向かって、持っていたこんぼうを振り上げ襲いかかる。

「くっそっ！」 目をして痛みにも備える。その刹那、ザシュッ！と肉が切れる音がし、目をあげると、ゴブリンが倒れていた。その死体の前には、返り血をあびた社がいた。

「危ないよ！ どうしてもう一発撃たなかったの！」 怒りが、しかし心配も混じった声で怒鳴られた。

「わ、わりい」 「もしボクが斬ってなかったら死んでたかもしれないんだよ！」 「だから、ごめんって」 「次はないと思ってね！」

そのまま2人は、また無言で進み始めた。

なにもしゃべらなかった。ただ無言で歩き続けた。

5分ぐらいたっただろうか。少し開けた場所へですぐに、茂みが音をたて揺れた。その音がどんどん近づいてくる。

同時にカラン、カラン、となにかの音も。

「さっきよりおい…」 「ほら、構えて！」

『ギシャアーーッ!』と茂みから6体のゴブリンがあらわれた。そしてその後ろには：

スケルトン
「動く骨!?!」

そう、それは動く骨、スケルトンだった。手に剣と盾を持ち素早い動きで接近してくる。

「アイススピアッ!」

優のはなった魔法は、スケルトンのすこし右を飛び、一匹のゴブリンに当たった。

スケルトンが接近してくる。

「アイスウォール!」とつさに氷の壁を作りスケルトンの動きを鈍らせる。

しかし、この時点で優は冷静さを失っていた。

アイスウォールは、氷を2個消費する大技である。つまり残った氷はあと1個。

向こうでは、社の周りに3体の死体が転がっており、ちょうど1体を斬りおとしたところであった。

社はつぎのゴブリンに向かっていく。とその背中へスケルトンが向かいだした。

「やらせるかっ!」

優はとつさに氷の壁を解除し、社にむかって走る。社は最後のゴブリンを斬ったところだった。

その社の背後でスケルトンが、剣を振りかざす。

「えっ!?!」 「間に合えっ!」

ザシュッ! 「うぐっ!」

肩に激痛がはしった。肩の鎧をつけていたので、腕が切り落とされることはなかったが、鎧を碎いて剣が食い込んでいた。社の表情が、絶望の表情へと変わる。

「ゆ、優くん……」

社の目の前に優が立ちふさがっている。そしてその肩から、血がダラダラと……。

「こんのお……、これくらいで……、くたばってたまるか……っ！」
ふるえる片手で、ポケットからライターをとりだし火をつけ呪文を唱える。

「エクスプロージョンッ！」

スケルトンの頭が爆発する。スケルトンは粉々になり、優は衝撃でふっとばされ近くの木に背をうちつけた。

「優くんっ！」 社が近づいてきて、傷の手当てをする。

「ボクを……かばって……」 社は、涙を流していた。

「気に……するなよ……、守られてばかりじゃ格好わりいだろ……」
今の台詞なかなかかっこいいな、とか馬鹿なことかかんがえてたら意識が遠くなってきた。

……死ぬ、のか？

——ううん、ここはどこだ？ ベッドの上？

体を動かそうとしたが、肩に痛みが走る。

「いっっ！」 「あ、起きた!？」

む、杜くんの声がする。となるとここは……、

「保健室だよ。先生が運んでくれたんだ」

横をむくと、杜くんがいすに座っていた。目が腫れていた。泣いていたのだろうか。

「それにしても、ホントよかった……、ほんと……」 社の頬に一滴の水が流れた。

「お、おい。泣くなよ。俺の自業自得なんだし、お前だって俺を助けてくれたじゃないか。貸し借りなしだろ？」

「無理だよ……、あれぐらいじゃゼロにならない……」

困ったな、これじゃあ泣きやまない。よし、

「俺の友達になってくれ」 「……な、なんで？」 「それで貸し

借りゼロ、ってことじゃ駄目かな……」 なにいつてんだ、俺。

「う、うんっ！いいよっ！」 「はは、よかった」

これで、一件落着だな、社の笑顔をみながらそんなことをおもっていた俺のからだに暖かな感触が。な、なんだあ？

「ユウッ！もう今度から無茶しないでっ！約束してっ！」社が泣きながら俺に、抱きついていた。

「や……、約束する……」とかなんとかいったと思うぞ、俺は。



「——まあ、そういう訳で」と、一部始終をミコトに話したわけだが、

「……………」顔を赤くして、黙りこくっていた。熱でもあるのか？とそこへ、

「おい、優ー、ミコトさーん、飲み物買ってきたよー」社が帰ってきた。

「おう、ありがと。今ミコトに、俺と社の友達になったきっかけをだな」 「えっ、あれを言ったの!？」 「おい、お前も熱あるのか？顔が真っ赤だぞ。」

その社にむかって、

「ヤシロくん、あんたには負けないからっ！」なにがだ。

「ねえ、優！どこまで話したんだよ！」 「お弁当っ、お弁当わけて

あげるわっ！」

「うるせえっ、飯食わせろお！」

ナガノの街に、優の叫びが響いた……。。

あの日の誓い 後編（後書き）

「暁と編集長の後書き、はっじまっるよー！ー！」

「黙れ（バコッ）」 「イテ」

登場人物

作者 暁

編集長 ^{アイ} I 両名とも実在します。この中の一部のやりとりも、ありました。

「さて、後書きの始まりですが……。編集長、なんか怒ってる？」
「お前……。活動報告でもうしばらくは、この作品をださないとい
つてただろう……」

「ふっ、あんな編集長の指図、うけるわけないだろ？」

「なめてんのか」「ゴメンナサイ、バズーカしまって？ここ俺の
部屋だから」

「もっと上手くなるまで更新するなといったはずだが？」

「いやいや、これには訳があるのよ」「どんなだ」

「まず、あの日の誓い前編、をだしたら、後編もださないとムズム
ズするだろ？」

「お前の作品にそこまで期待するやつはいない」

「グサッ！と、とにかく書いたんだからだしたかったの！」

「それはいいとして、お前の作品へのアドバイスがほとんど改行に
ついてじゃないか。勉強しなおせ」

「よくわかんないんだよー」「ウザイ」

「あんたは書かないからわからねえだろ！……ごめんなさい、メリ
ケンサックしまって？」

「あと、今回の作品……。社がおかしいんだが……」

「追求しないでくれ……。俺も夜中にいたせいか、あとでもってくるはずのシーンを少年時代にいれたかったんだ」

「そのせいで最後無理矢理っぽくおわってるじゃねーか。てか、どっちにしろ書くつもりだったのか。あと、お前の恋愛小説の定義がわからん」

「わかってないなあ。最近の男なのに女みたい、ってのがはやるんだよ。逆もまた同様」

「うん、つまりパクリ宣言だな」

「ちがう！ちがうよ！ちよ、携帯どこにかけるつもり！？『あ、フ○ミツ○文庫ですか？』ノオー！ー！やめてよ！訴えられるよ！裁判無理だよ！」

「大丈夫だ、俺が裁判員裁判に立候補してやる」

「有罪にするきでしょー！」「お、よくわかったな」「チクショー！」

作者が、現実逃避でゲームをし始めました。

5分後……

「とにかく、これがでたんだから、当分違う作品に専念するんだな？」

「（ゲーム中……）……へ、なんて？」「消す」

「ちよ、サラッと怖いこといわないでよ！」

「ふん、そもそもその作者名も変えたほうがいいだろう。特に壮羅」

「まあ、それくらいなら……」

「あと、作品名も」「無茶いうなー！あんたが考えろよ！題名とかかんがえるのムズイんだぞ！ゼエハア、ゼエハア（息切れ）」

「ナイスツツコミ」

「……本編より後書きのほうが評価されたりしないよな？」

「そうになったら、あとがき作家になれ」「時○沢先生かつ！」↑し

ってる人少ないツツコミ。

「んで、このUSBにはいつてるプロットが次の作品のプロットなんだな？」

「イエッサー」「使い方違うぞ」

「そのプロットが反対されても、『I・おい、つつこみ無視か』俺その作品かくから」「俺の判断も無視か！」

「だって書きたいんだよ！それ」

「題名は？」

「メカニック、英語でかくかカタカナか迷ってる」「ないわ」「なんだと！」

「もっとかつこいい題名にしねえと、ハッキングして投稿できないようにするから」「理不尽だっ！」

「もう、書く事ないだろ。こんなあとがき終わるぞ」

「ちょ、それはひど」プツツ

というわけです、はい。

編集長なんて、無視しちゃえー、といきたいところですがね。

メカニック（仮）のイメージが脳を浸食して……、

同時並行って手もあるんですが、よくよくカレンダーみたら、テスト期間が……。

点数わるいと、マイPCがリサイクルショップに並ぶので、テストは本気でいかないと。

この長いあとがき、意味あんのかね？

目覚めし影

梅雨合宿……、それは俺たち7回生の、大イベント。

A、B、C、Dのすべてのクラスが、別々の魔王支配地にいき、訓練などをする。

いわゆる野外実習である。

目的はいろいろとあるが、仲間との信頼を築く、というのが最大の目標らしい。

「というわけで、このしおりを見て、準備しとくように」

そういつて、九護先生はDクラスの生徒に、梅雨合宿のしおりを渡した。

なにになに？森にいつてキャンプ、か。あつさりしてるなあ。

て、ちよつとまでよ……、これは……？

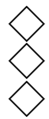
「先生、釣りとかキャンプファイヤーって遊びじゃないですか？」
クラスの一人が訪ねた。俺もききたかったところだ。

「むう、それか。それは校長が決めたんだ。まあ、なんらかの目的があるんだろう」

なるほど、あの校長がきめたなら無理もない。

何代目かは知らないが、今の校長、朱雀^{スザク}校長は、イベントが大好きなのだ。

去年の秋の、仮装大会は、誰にとっても苦い思い出であるはずだ。
「とにかく、1週間後だから、準備はしておけよ」



「ヤシロはどこに合宿なんだ？」

「僕は海沿いだよ。釣りとかするらしいんだ」

「俺も釣りあるぞ。校長釣り好きだなー」

夜の10時をこえ、俺は寮でヤシロとそんな会話をしていた。

「はあ、ユウといけないの、残念だなあ」

「確かに。授業は一緒なのに」

この学園の授業は、A、B、C、Dの各クラスから、決められた人数が集まって1グループとなり、授業を受ける。

下位のクラスが上位のクラスを見て、成長できるようにそんな制度になっているらしい。

その制度のおかげで俺はヤシロと一緒に授業をうけられるのだが。

「ユウが行く森って、北の森だよ」

「ああ、そうだが？」

そういうと、ヤシロはとても険しい顔になった。

「……その森、でるらしいんだよ……」

「……はあ？」

なんだ、怪談か？ヤシロがそんな話に興味をもつとは。

「僕のクラスの人から聞いたんだけどさ……。夜中にその森で、人影が何かを探し回ってるらしいんだよ」

「……ふーん」

「でね、そのクラスの人怖くなってすぐ帰ってきたらしいんだけど、あんな魔物だらけの森に人影なんておかしいよね」

「魔物じゃないのか？」

「それが、絶対人だったっていうんだよ……」

「へえ。ってその人はなんで森にいったんだよ」

「落とし物を捜しにいったんだって」

「よくわからん話だな」

「とにかく、ユウも気をつけてね」

そういつて、グイと迫ってくるヤシロ。

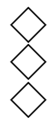
「わ、わかったから。もう寝る時間だ」

「あ、ほんとだね。お休みー」

「ああ、お休み」

俺は電気を消し、ベッドにはいった。

そして、俺はすぐに眠りにおちた……。



一方、北の森では……

「んうー。眠いなあ。誰？俺様の眠りを妨げるのは……」

「……やっと思つたぞ」

「あんた誰？」

少し小さな人影が、2倍もあろうかという人影に問いかける。

「ふん、そんなことはどうでもいい。さっそく俺の役にたってもら
うぞ」

「……はあ、なんで俺様があんたの手伝いしなきゃなんないの？」

「誰が貴様の封印をと思ったって——」

「気持ちよく寝てたのを無理矢理起こすような人ときゃあいたくな
いね」

少し小さな人影は、そういうと右手をもう一人の影に向けた。

その刹那、夜の森に、紫の光が輝き、衝撃が森をざわつかせた。

そして、辺りがまた静かになったときは、影は一つになっていた。

「ふう、この程度で僕の封印をとこうなんて、バカだねえ」

小さな影はそういうと、森に向かって歩き始めた。

そしてつぶやいた。

「さて、俺様の世界征服計画、第2楽章の始まりだ。わかってる、
封印されるなんてドジは、もうふまないよ……」

目覚めし影（後書き）

長い間があき申し訳ない。

もう一つの小説かいていたら遅くなりました。

さて、今回の話の最後に、怪しい影が登場します。

影の正体はいかに！

次回、勇者のまなびやつ！、第6話 「梅雨合宿1日目」

次回もお楽しみに！

梅雨合宿1日目

うっそうと茂る木々。あふれるマイナスイオン。

俺たちDクラスは、梅雨合宿地の北の森にきていた。

「すごい山奥ねえ。こんなところに3日間とか拷問よ、拷問」

森に向かうための飛行船（地上は魔物が危ないので、バスなどはつかわれていない）から降りたミコトの、第一声がそれだった。

「合宿なんだ、当たり前だろう？」

「そうはいつでもね。あたしは女の子なのよ？」

女の子だからいろいろとアブナイんだ、と目で訴えてくる。

——やれやれ。

「大丈夫だ。お前みたいなのを襲うような奴は、このクラスにはいないからさ」

「……あとでぶちのめす」

軽い冗談だったのに、ミコトはとてつもなく恐ろしい形相でこちらをにらんでいる。

やばい、背筋が寒い。

「ほんまあかんでえ？ オンナノコにそんな冗談は」

俺たちのあとに降りてきた男子生徒が、突如そう言った。

天然パーマにたれ目が印象的で、よく言えば美形、悪く言えば間抜けそうな、そんな顔立ちだった。

「誰だ？」

「オレか？ オレはケンタロウ。牧原まきはらケンタロウや。ケンタでもタロウでもどっちでもええで？」

馴れ馴れしいヤツだ。しかし、ケンタロウ……。どこかで聞いたような名前だな。

えーと、なんだったか……。

「じゃああたしはケンタで」

「そうか。よろしくたのむわ！」

いかん。ミコトがこの怪しい男のペースに乗せられている！
しかし、なんだったか……。

「あんたはDクラスでしょ？じゃああたし達と一緒に行動しない？」
「？ あれ、ここDなんか。オレはてっきりAクラスや思ってたきたんやけど」

「っ、まさかっ!？」

こいつはAクラスの中でも上位の男！

数々の魔王を、ダガーナイフ2本で沈めるといふ、
「通り魔ケンタロウ！」

「お。オレのことしっとんか。嬉しいなあ」

その異名に似合わないきさくなひとがらと関西弁は、女子の間でも人気だとヤシロに聞いた気がする！

「なんであんたがここにいるんだ!？」

「いやあ、オレうっかりさんでな？ Aクラスの飛行船と逆にあったやつに乗ってももうたみたいなんや」

「なんて天然なの……っ」

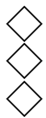
あまりのアホらしさにミコトが絶句している。

「しかし困ったもんやな。一回先生にきいてみるわ。ほなさいなら」

ケンタロウは手をふりながら、先生と真逆の方角へ走っていった。

「あれは天然っていうより方向音痴ね……」

同感だな。



俺たちは今、山小屋の掃除をしている。山小屋は10戸ほど。
生活は山小屋で過ごすらしく、まわりには魔物よけの結界がはられていた。

「きつたない部屋ねえ。もつとマシなところないのかしら」

さっきからぶつぶつとミコトが愚痴を言いながら、ほうきで床を掃いている。

「しゃあないでミコトさん。使われるんは一年に一回っちゅう話や」
ケンタロウは今更Aクラスと合流することはできないらしく、Dクラスの合宿にさんかすることになったらしい。

本人にとっては、どっちでもいい、といった様子である。

「せや、部屋割りはオレとユウ君にしよう！それがええ！オレも知らんやつばっかで気まずいんや」

「いきなりなにを言い出すかと思えば。とても気まずそうにはみえないが？」

「ちやうちやう。気まずいからこそ、フレンドリーに明るくなるベキやろ？」

「……好きにしてくれ。あと、同室なら君づけはやめよう」

ほんとうに明るいやつだな。

感心をとおりこしてあきれる。

「とにかく、早く掃除おわらせるぞ」

「はいはい」

「せやな。そうしよ」

なんだかんだいって聞き分けはいいよな、この2人。

掃除が終わると、もう夜になりかけていた。

晩ご飯の用意をするらしく、女子は調理班。男子は薪集めとなった。

魔法をつかえば炎などすぐにでるのだが、九護先生から、

「お前らは魔法にたよりすぎだ！そもそもお前らは魔法をまともに扱えるのか！？」

という説教がとんだので、仕方なく従うことにした。

合宿まで九護先生がついてくるとは……。Dクラスも信用されないもんだな。

とにかく薪だ薪。薪を集めるぞ。

「ユウはほんま熱心に薪あつめるなあ」

一緒に薪集めをしていたケンタロウが、そうつぶやく。

「好きでやってるわけじゃない」

「好きでやつとるようなヤツがおるのか？」

少なくともDクラスにはいないな。

そんなどうでもいい会話をしながら、薪を集める俺達。

薪は結構おちてそうなもんだが、いい大きさのものは少ない。

「好き嫌いっちゅう話やったら……」

「なんの話だ。Aクラスには薪厚めが趣味のやつがいるのか？」

「ユウはミコトさん好きなんか？」

「ぶっ!？」

いきなりなにいいだすんだコイツ!?

「普通の友達だっ!」

「はーん、向きになるのが怪しいなあ」

落ち着け俺。動揺しては、逆に不自然だ。

「(スーハースーハー) そんな訳ないだろ? 友達、友達」

「深呼吸するか、普通」

ケンタロウはたれ目を細めながら笑っている。

くっ!

「そういうお前はどうかんだよ!」

「オレか? オレは女子なら誰でも大歓迎や」

……逆にこうキツパリ言われると反論しにくい。

「特に20代以下で美人やったらめっちゃ大歓迎や。ミコトさんも例外やない!」

「……12才ぐらいは?」

「全然オツケーや!」

こいつはやばい。アブナイ人物ここにいたぞ、ミコト。

まさか通り魔ケンタロウの本性がこんな変態だったとは。

これをしたたら女子からの評判は、少しは落ちるのだろうか。

「まあ、女はこわいところもあるけどな」

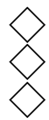
今はお前のほうが怖いよ。

「もうこの話はやめだ！薪集めに集中！」

「上手く話題そらしたな」

ククッ、と笑うケンタロウ。

Aクラスにも、変人っているんだな……。



薪集めを終えて山小屋にもどると、もうおいしそうなカレーができていた。

キャンプはカレーときまっているのだろうか。カレーが嫌いなわけではないが。

よく見ると、カレー鍋は炎魔法で温められている。

あれ……、薪集めた意味ってあったのか？

「あ、カレーよそってきたるわ。ちょっちまっときや」

そういつて、ケンタロウは俺とミコトのぶんも、カレーをもってきてくれた。

「よし、食べるか」

「いただきます」

「いただきます」

月がでている野外での食事でも悪くない。

「このカレー、あたしも作ったのよ。美味しい？」

「ああ、美味いぞ」

「普通にうまいで」

「ホント？よかった」

ミコトは満足そうに笑いながら、またカレーを食べ始める。本当、おいしいな。このカレー！

そのままパクパクと食べ進めていると、目の前にスプーンが突き出された。

「……あーんして」

いきなりの事態に、俺の頭上でハテナマークが浮かぶ。

……あーん、だと？

見るとミコトが恥ずかしそうにスプーンを向けている。

いったいどういうことだ？

逆方向をみると、案の定ケンタロウがにやにやしていた。

「ほれほれ、たべてあげなや」

ケンタロウが囁いてくる。

ここで素直に食べたほうがいいのだろうか。

いや、恥ずかしがっては逆にケンタロウにバカにされる。

「……あーん」

俺は素直にカレーをいただいた。

やっぱり恥ずかしいもんだな。

……って、

「辛あああああああああ！」

なんだこれは！のどが焼けるように痛い！

まさかっ！

「ねえ、ユウ？そのカレー、唐辛子とわさびとババロア入れてみたの」

「からしはいれなかったんかいな」

ケンタロウがくくくつ、と笑う。

笑う暇があったら水をわたせよっ！

くそっ、なんでだ！？俺がなにか怒らせるようなこと……、

「ユウ……」

「な、なんだ？ ケホッ」

「少しは朝の発言、反省した？」

……ケンタロウ、女って怖いな。



「おっ？ あっちから美味そうな臭いがするね」
夜の闇のなか、森のなかにたたずむ一人の影。

「そーいやおなかへったなあ……」

影は、はぁ、とため息をつき、座り込んだ。

「よし、夜中にいただきにいこう！」

立ち上がり、大きく伸びをする影。

そして――

「まずは君たちを殺してから、ね」

茂みに隠れていたゴ布林たちにむかって、手をかざすのだった
……。

梅雨合宿1日目（後書き）

今回の話、いかがだったでしょうか！

オチから考えたわけではありませんが、結果として上手くおとせたのではないかな、と思います。

次回は梅雨合宿2日目。

怪しい影の正体が、そろそろあきらかになるでしょうか。

次回、お楽しみに！

※長いあとがきは、まだ書けません。あしからず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8275w/>

勇者のまなびやっ！

2011年11月7日03時28分発行